

■ 研究発表会が開かれる

この二月十六日、今年度の最後の事業である研究発表会が、荒砥地区コミュニティセンターで開かれました。

今回は「荒砥のにぎわい」ということで、先に江口儀雄さんから荒砥の町の成り立ちを聞いた後、佐藤京一さんからは戦前の荒砥町の経済事情や料亭・遊郭のことなど、めったに聞けない話をお聞きしました。



この日に配布された資料の中の、大正十五年八月発行「大日本職業別明細図」は当時の町の様子を表した地図で、当時の職業名や電話番号の表記などを見るとなくなった銭湯や寺などがあり、さらに興味が湧いてきます。

また、その後の懇親会では「鯉こく」を中心に南蛮大根、かもち、こんにゃく、甘酒などが出されたほかに、今では見ることもできない、荒砥で作られた銘酒「壽」などが振舞われました。気分よく酔ったところで「お富さん」や「青い山脈」など、昔の流行歌を皆で声をからして歌いましたが、まさにこの日だけの「荒砥のにぎわい」でした。



■ ザリガニ考

丸川二男

1

今年はことのほか暑い夏だった。そのせいかどうかはわからないが、家の裏を流れている川につぎつぎとアメリカザリガニが流れてきた。何十年もここに住んでいるが、初めてのことである。川の上流には庭先に比較的大きな池を持っている家が二軒あるから、そのあたりで大きくなったものが外に流れてきたものらしかった。ただ、どうして今年になって・・・なのかはわからない。以前、ザリガニは水田の苗を食い荒らすとしてやっかいものにされたが、このごろは水路などの改修で居場所がなくなったり、農薬などで幼虫が死滅したのか、あまり見かけなくなった。

流れてくるザリガニは大きさもオス・メスもさまざまで、見つけるたびに網ですくい水槽やバケツに入れておいた。ただ、狭い所に多数入れておくと共食いするし、喧嘩が絶えない。水槽が足りず、使わなくなった漬物桶などに二、三匹ずつ入れておいた。中には途中で逃げられたり、死んだものもいて、都合十二匹になった。容れ物は市販の水槽もいいが、昔の火鉢がいい。縁の形状が脱出を防止するし、夏場は水温が上がりにくい。中が暗いのもザリガニの生育に適しているだろう。

ザリガニのそれぞれの個体は常に旺盛な脱出願望を持っていて、なかなかあきらめが悪い。もっとも水槽の中に塩ビのパイプを入れたら、今度は中に隠れたまま出てこない。気に入ったのか慣れたのか、その後に逃げたものはいない。ただ、ザリガニそのものが夜行性であり、パイプや割れた植木鉢などの巣穴も、朝になると別のところにあたりするから、夜間に何をやっているのかはわからない。またそれぞれに個性というか、相性もあるら

しく、自分の巣穴に近づいてくるものをすぐにハサミを振りかざして威嚇するものがある。別のもと一緒にするとおとなしくなるのはオスとメスの関係ばかりではないらしく、仲間はずれやいじめは人間社会とさして変わらないらしい。

ところでこのザリガニのハサミは意外と強い力がある。油断して指先を挟まれた時には血が出て、しばらくにぶい痛みが残った。この小さな体のどこにこんな力があるのかと思うほどである。このハサミはおおよそ威嚇や攻撃、脱出のために使うらしく、餌を口に運ぶのはその下についている別の手足である。一对のハサミのほか、左右に四対の手足があり、その先にはそれぞれものをつかむことができる小さなハサミのようなものがついている。見ているとそれぞれが時々手足の役割をしている。

逃げたのは雨が降って水槽の水かさが増えた時に、この時とばかりに縁を超えて脱出に成功したものと、水槽の水を交換した時、外に出した隙にスルスルと排水パイプに入ってしまったものの二匹である。排水用のパイプに入ったものを棒で突いて追い出そうとしたが本人は出てこず、ホースで水を流したらハサミだけが二つ流れてきた。ハサミは体から取れたにもかかわらず、時々閉じたり開いたりしていた。比較的立派なメスだったから少し哀れに思い、ハサミを庭先のボタンの根元に捨てておいた。翌朝になったら、ハサミのないザリガニがボタンの木の側で死んでいた。夜のうちになくなったハサミを探しにきたものらしかった。そのうちに若い娘になって出てくるかと思ったりもしたが、今のところその気配はない。

途中で死んだのはまだ成長しきっていないものと、脱皮がうまくいかなかったらしいものが三匹いた。やはりザリガニにとって脱皮は命がけのことらしい。比較的大きなものは捨てるのも惜しいのでゆでて食べたが、少し泥臭いもののエビのむきみのようなもので、淡白な味である。このアメリカザリガニが中国で食材として人気があり、それも日本から輸出されたものだという。外来種として捕獲されたものが商品となり、需要に追いつかないというので、いままではやっかいもの扱いだったザリガニを、今度は養殖を考えるとこのだから何か奇妙なことが起こりつつあるらしい。

しばらくすると、あちこちで交尾を始めた。

もことから適当な大きさのオス・メスを組にして水槽に入れていたからだろう。ふだんは水槽の中をのぞくとすぐに巣穴や石の蔭に隠れるくせに、この時はまったく人の気配など気にしない。オスはメスのハサミを丸ごと抱えて、ほとんど身動きできないようにしたまま、ともに動かない。メスも逃げるふうでもない。



その間、五分から長いもので十五分あまり、正面から抱き合ったままである。暑い中、真昼間からなんたることか。気温や水温がどの程度関係しているのだろうか。オス・メスとも、それぞれにわけがあるのだろう。

2

流れてきたザリガニの中に片方のハサミのないものが二匹いた。オスとメスでちょうど大きさも同じぐらいで、しかもは失ったハサミはそれぞれに右と左だった。ふと「同病相哀れむ」という言葉を思い浮かべた。何が元でそれぞれのハサミ（手）をなくしたかは知る由もないが、仲良く暮らせ、と二匹を小さな水槽に入れておいたら、数日後、塩ビのパイプの中で交尾していた。私がやれやれと思ったのはいわば彼らへの同情というか、憐れみのようなものをどこかに持っていたせいだろうか。

そのうちに大きな缺を持ったオスが流れて

きた。測ったらハサミの先から尾の端まで約十七センチあった。大きさも見事だが歩く姿も堂々としている。ここまで大きくなるのには何年かかっているのだろうか。餌は市販のザリガニ用のほかに、鯉用の餌、そうめんなど何でも食うが、やりすぎると水がすぐに汚れて臭くなり、酸欠になりやすい。ただザリガニは直接酸素を取る仕組みを持っているとかで、暑い時などはすぐに水面に出てきて木片などにつかまって横になっている。ふてくされて昼寝しているようにも見える。

一か月ほどすると、メスの腹のあたりにフワフワした黒いものがついているのに気がついた。産卵した卵を抱えているらしく、いつもより動きも鈍く、ほとんど巣穴から出てこなくなった。そういえばザリガニは自らの腹に卵かかえ、ふ化させると聞いたことがある。オスがふ化したばかりの幼虫を食うとも聞いてすぐにオスを別棟に移したが、卵がいつごろふ化するかはわからない。

一方、次々と発生するボウフラには手の施しようがなく、蚊の発生には悩まされた。水槽や桶の周辺には常に大小の蚊が飛び交い、ずいぶんと刺された。メダカがボウフラをよく食うと聞いたが、ザリガニとの相性はどうか、まだ同居を試みていない。

ところでこのザリガニたちは、どうやって冬を越すのだろうか。水槽を屋内に持ち込んでも、水が凍らないようにするのは無理だろう。もっとも自然の中では泥水の中で冬を過ごしているのだろうかから、心配するほどのことではないのかもしれない。やはりどんな生き物であれ、飼いつけているといろいろなことぶつかるもので、発見もあれば失敗もあるもので、人間（子供）の成長ともどこかで共通するものがあるような気がしないでもない。

見かたを変えれば一部の生物を除き、植物や昆虫、鳥類や魚類など、現在の地球上のあらゆる生物は、気の遠くなるような時間と厳しい生存競争や環境の変化に適応すべく進化を繰り返してきたはずである。それはまた別のいい方をすれば絶え間ざる生殖の連続の結果でもある。ヒトも例外ではなく、一部の生物学者が「ヒトの脳の中には、今もヘビやワニの脳の痕跡が残っている」と主張するゆえんでもある。

秋も深まり気温が低くなると、ザリガニも動きが鈍くなってきた。エサも食べないから水も汚れなくなった。メスは自らの腹に卵を

抱えたまま丸くなって動かない。時々、棒などで突付くと動くから死んでいるわけではない。もしかしてこのまま卵がふ化せずに冬眠してしまうことになったら、抱え込んだ卵はどうなるのだろうか。



そのうちに原因はわからないが死んでしまったメスがいた。他のよりも大きかったのでまたゆでて食べようと殻をむいたら、腹の中に小さな卵がまとまってあった。卵が外に出るまで至らなかつたらしいが、食べてしまったこの卵と外に出てザリガニが抱え込んでいる卵との間には、どのような違いがあるのだろうか。

あれもこれもつぎつぎとわからないことばかりである。ともあれ、なんとか無事に冬を越して春にはまたザリガニたちの姿を見ることができればいいと思っているのだが、さてどうなることやら・・・。（2018・10）

少年になってザリガニ追いかける
囚われの身ともならずばわかるまい
長いヒゲゆすって逃げ道考える
手を探し命尽きたりボタン咲く
生き延びていつか果たさん仇討ち
ザリガニに習いわが身の旅支度

■ 横越村・白ヶ沢・大日堂

そもそも「横越村」がいつごろ、どのあたりにあったのかということがはっきりしない。つまり文献資料が乏しいだけでなく、飛び地

があちこちにあっただしく、田尻村との境界がはっきりしないのである。



この石棒は「横越」といわれる西横田尻地区の水田の中から出てきたものである。台座に出土した場所とその土地の所有者の記載がある。(出土した日時は記載がない)縄文後期のものとされ、似たようなものは東北のあちこちから出土して祭器として使われたとされているが、具体的にどのように使われたかは不明である。この周辺の河岸段丘からは各種の石器類も出土しており、早くから人が住み着いていた場所といえるだろう。時代が下ってこの中心部には「館(タテ)」が作られ、一帯は「横越館跡」ともいっている。

一方、金剛山・金澤寺は焼けて歴史的な資料は少ないが、寺の裏を流れる絹市川の上流の臼ヶ沢には、銀を産出する鉱山があった。境内にはこの鉱山の落盤事故で亡くなった人々を供養するために建てられたという千体地藏がある。ほかにも薬師堂、蚕神の馬鳴菩薩や大般若経、文殊尊が祭られ、近世は養蚕で栄えた村の姿を今に伝えている。また古くは掘り出した鉱石を山から運び出し、精錬する場所として九反田は「町」として栄えたといわれ、その当時の市を知らせる「市札」が検断職を勤めた鈴木家に残されている。

臼ヶ沢は西山の北西部を流れる小河川で、その南側には大日堂がある。お堂の前には湯殿山に通じているとされる古道があり、道路脇に古い板碑が建っている。ここの本尊・大日如来は長い間、秘仏とされてきたが以前に厨子を開けたところ破損がひどく、かつて金田章さんたちが修理に当たったと聞く。

お堂が杉の林に囲まれ、さらに厨子によって守られていたせいか、本尊や光背は金箔のはく離も少なく、均整のとれた顔立ちの仏像である。製作された年代や場所、仏師などはこれからの調査を待たなければならないが、いずれにしても町の文化財として指定され、

守られるべき仏像であろう。

だが、こうした仏像をこれからも秘仏として守ってゆくのかについてはなかなか意見がまとまらず、事が前に進まないのが現状である。秘仏とするのは盗難を恐れてのことらしいが、防犯については各種のセンサーが開発されており、昔とは比較にならないだろう。関係者は積極的な公開こそが、むしろ防犯に役立つことを認識すべきではあるまいか。



仏像を調査してその価値を地区民に理解してもらふことと、防犯を含めてお堂を管理することとはまったく意味合いの異なることである。それに仏像はもともと礼拝の対象であり、地域の住民にその存在を知ってもらうことが防犯の動機付けになるのではなからうか。今のところ関係者の努力に期待するしかなさそうである。(丸川)

■ 史談会・これから

町の中の各種団体と同様に、高齢化・体調不良などの理由から「退会」の連絡がくる。今もって「むずかしい」、「敷居が高い」と敬遠され続けているこの会を、今後どうしていくか。この地域に必要な団体なのか。今のままの組織でいいのか。どうすれば新たな会員を確保できるのか。それらを本気に考えるべき時期にきているように思える。会員諸氏の考えを伺いたい。(川)